このまちをもっと好きになるために
私たち一人ひとりができることは何だろう

金田　綾子

大正大学 地域構想研究所 最上支局

令和３年度の完成を目標に町では最上町の第５次総合計画の策定に向けて、行政と町民が一体となって取り組んでいます。人口減少と少子高齢化が進む中、町民ができる事、行政ができる事を考えながら協働のまちづくりを進めていくことが重要になってきます。

１．一つの取り組みとして新たな居場所づくり

小学生の場合

町では小学校の統廃合が進み、小学校区が広範囲になってきています。その影響により、特に児童の平日の放課後の居場所の在り方が問われています。なかでも〈学童保育〉への需要が高まっている背景を注視する必要があると考えます。

本来なら小学生のころは、「友達と遊ぶ」「地域の人々とふれあう」「自然と親しむ」等の豊かな育ちにむけた様々な経験の機会か必要であるはずなのに、それが最近は不足していると感じます。現在は町内に二校ある小学校も数年後には一校体制になる事が見込まれており、ますます学童保育に頼る現象が加速するものと予想されます。

〈学童保育〉と子供たちの居場所の関連性を考えれば、〈学童保育〉はあくまでも≪預かりの場≫であり、文科省が進める≪放課後子供教室≫とは一線を画するものですが、探究心の向上に繋がるプログラムの開発はどちらにおいても重要であると思われます。

現在最上町で〈学童保育〉を行っている場所は３か所ありますが、旧月楯小学校で行っている〈学童保育〉も利用者が少なくなれば小学校がある地域の〈学童保育〉と統合する事も視野に入っているのが現状です。統合された小学校から学童保育にまっすぐ向かう事になれば、集落内からはますます子どもたちの声が聞こえなくなる事が懸念されます。

又、〈学童保育〉の要件から外れた子ども達が各家庭に引きこもってしまう事がないように新たな居場所づくりが求められてくると考えられます。

高齢者の場合

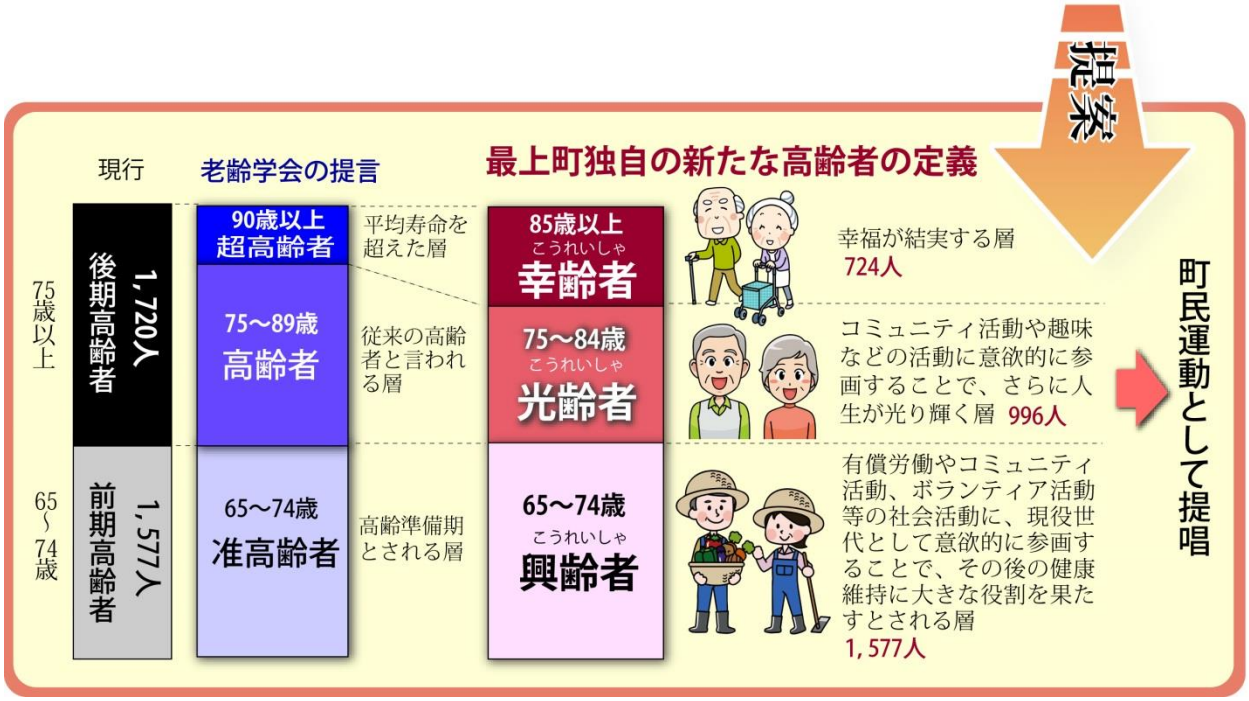
ＮＢＯ法人アルカディアもがみが「みんなの家」を拠点に行っている事業の一つに「いきいき介護予防塾」というのがあり、将来介護をうけることがないように、元気な高齢者が軽度の運動をしたり、歌を歌ったり、頭を使う問題を解いたりして半日を過ごす事業ですが、参加者は月１回の開催をとても楽しみにしています。この事業を発展させて、「みんなの家」に来れば自由にみんなと楽しく過ごせるという機会があれば、高齢者が意欲的に参加することでおのずと健康で下の図にあるような元気な光齢者が増えていくものと思います。

以上の事から、居場所づくりを分けて考えましたが、小学生と高齢者が一緒に様々な事が体験できる居場所があれば、親から子へ子から孫へ、伝えられることがたくさんあり、最上町がもっと好きになる

気持ちが小さい頃から醸成されるものと考えます。

旧月楯小学校では学校が閉校になる前は、高齢者と小学生が一緒になってお正月の伝統行事である「だんごさし」等が行われていましたし、月楯小学校が閉校になってしまったからこそ、田んぼアートによる田植えなどの行事も一緒にできる大切な作業となってきます。小さい頃の体験は大人になってからもふるさとを思い出す心の拠りどころとなるものと思います。

最上町の第５次総合計画のテーマである「このまちをもっと好きになるために」子ども達と高齢者がもっと触れ合う事ができるような、街なかだけでなく廃校になった小学校の一つの使い方として新たな居場所づくりを今後の活動目標としたいと思います。



最上町社会福祉協議会・最上町高齢者等の外出支援を考える会